

山岸 倫子 『障害』の肯定／否定をめぐる論議とピア・カウンセリングの意義

前半部分はなかなか意欲的な論考であると思う。ただ、インペアメント、ディスアビリティ、「障害」の腑分けが、筆者が主張するほどには明確ではなく、そのために、疑問を感じてしまう箇所がいくつかある。例えば、前半部分の結論として、「障害者の解放とは、『障害』の肯定／否定をあえて言わなくてもよい状態であり、インペアメントとディスアビリティについても、諸個人が、能動的に考えていける場ではないのだろうか」(30頁)としている。私もよく耳にする「障害は個性だ」という主張には、障害に対する過剰なこだわりの裏返しを感じる。したがって、筆者の言うとおりに、「あえて言わなくてもよい状態」がいいのだと思う。

しかし、ここで言われている「障害」にディスアビリティを含めてしまっているのだろうか。これまで展開されてきた障害者解放運動(いわゆる自律生活運動ではないことに注意)は、インペアメントを肯定しようとする動きではあっても、ディスアビリティを肯定する動きではなかったはずである。つまり、ディスアビリティの否定を唱え、それを実現させていくことで障害者の解放を図ろうとしたはずである。また、障害学の立場からしても、筆者の結論には違和感を感じる。障害学はオルタナティブな社会を構想するための学問でもある。したがって、「異化&統合」である社会を創造していくことが一つの使命となる。そうすると、ディスアビリティの否定を言わなければならないことになるはずである。インペアメント、ディスアビリティ、「障害」を明確に分けることの困難は重々承知しているが、もう少し丁寧に吟味していくべきであったと思う。

後半部分では、「障害」の肯定／否定をめぐる問題に対して、ピア・カウンセリングが有用であることを明らかにする、と記されている(26頁)。しかし、評者の読解力不足もあってか、そのつながりを読み取ることができなかった。ピア・カウンセリングはインペアメントの肯定に役立つものであり(筆者は「障害」を使っているが、これも腑分けができていない例である)、「肯定／否定をあえて言わなくてもよい状態」に資するものにどれだけなっているのだろうか。確かに、ピア・カウンセリングのリーダーの安積はそのようなことは言っているのだろう。しかし、それは彼女の言説がそうなのであって、ピア・カウンセリングによって「あえて言わなくてもよい状態」の障害者がどれくらい誕生しているかでその有用性は決まるはずである。

以上、荒っぽいながらも興味深い論考ではあった。さらなる精進を期待したいところである。